
姫の守り神

ハナモト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姫の守り神

【Nコード】

N4354Z

【作者名】

ハナモト

【あらすじ】

ある日の朝、カルシアが釣りに行ったら一人の女性が流されてきた。嫌々ながらも彼女を助けたカルシアは自然と彼女の大きな問題に巻き込まれていく

01 流れてきた女

いつもどおりの朝だった。

何の変哲も無い朝だったのだ。

だけれど今日は勝手が違う。

俺はいつも通り、今日の食事を取ろうと川へと向かったただけだ。

流れが少し速いものの、穏やかで大きな川。

随分と繰り返した動作で釣り糸を垂らし、すでに二時間ほどが経っていた頃。

十分に食事を釣り上げ、後一匹で終わりにしようと思っていた頃。なんで切り上げなかったのかと、後から酷い後悔に苛まれてしまった……

「……なんだ、あれ」

思わず呟いてしまう。

川の中ほどをゆらゆらと黒い物体が右から左へと流れていくのが目に入った。

汚れのまったく無い綺麗な川には似つかなく、遠くからでも酷く目立って見えた。

じつと目を細める。

あまり見たことの無いものだった。何かよく分からない。なんだろうかと考えて、ようやく一つの答えに辿り着いた。

「……人、かな？」

木の枝か板かを抱くようにしている人に見えた。

自信は無い。

とはいえ人だとしたらさすがに放っておくわけにもいかない。少し悩んだものの、服を脱ぎ捨てて助けに行く。

川は子どもの頃からの遊び場だ。泳ぐことに何の問題も無い。

勢いをつけ飛び込むと黒い物体にまで近づいていく。

流されていくその物体にすぐに追いつき、ようやくはつきりと物体の正体を見る事ができた。

それは黒い服で男装した長い黒髪を蓄えた女性だった。それも飛び切りの美人。

しかしそれを喜ぶ気にはなれない。

「やっぱり人間か……」

少々の嫌悪感を感じながらも抱え込む。女性独特の柔らかな感触が腕の中に広がった。

岸まで何の問題も無く辿り着くと、すぐに女性の呼吸を確認する。さすがに川の中でそんな確認をする余裕は無かった。

「……息があるな。気失ってから川に落ちたのかな？」

一人ごちると脱ぎ捨ててあった服を着て女性を背負う。思っていたよりも重さは無い。

釣り道具を取り、帰路に着いた。妙な拾い物をしてしまったと若干の苦々しさを感じながら。

ちよつとした森の中にある、住み慣れた小さな家に入ると女性の濡れた服を脱がせて体を拭き、自分の服を適当に見繕って着せるとベッドに寝かせておく。

すぐに家の外に出て石を組み、あらかじめ集めてあった枝を使って焚き火を作る。

人間を連れてきたこと以外はいつもの日常。

慣れきった手つきで火をつけ、釣ってきた魚の腸を小さなナイフで取ると順に焼いていく。

炎が目の前でゆらゆらと揺らめく。

魚が焼ける間に彼女の濡れた服を木の間に干し、女性の様子を少しだけ見ておくことにした。

たいして物を置いていない家に戻る。

目に付くのは壁に立てかけられた古い剣とベッドと、肘掛け椅子にいくつかの本。

その中で女性だけが異彩を放っている。異物のように思えてならなかった。

この家にあつてはならないもの。

そんな感じが胸の中を占めていた。

女性の顔を上から覗き見る。人間自体を見るのがいくらかぶりで、かなり久しいことだった。

しばらく起きそうに無い。

嫌悪感以上の興味が無くなり、焚き火の元に戻る。魚は十分に焼けていた。

無造作に一つを取りほお張る。大した味も無い、食べなれた味があった。

三尾目を手に取った時、家の中の空気が動いた気がした。

手に取ったばかりの魚を戻し、意外と速かったなと思いながら家の中に戻る。

扉を開けると予想にたがわず、女性がベッドの上で上半身を起こしていた。

「起きたんだ」

声をかけ、家にたった一つしか無い椅子を持って近づく。

女性は驚きの目をこちらに向けている。何が起こったか分からない、そんな目だった。

「……ここは？」

「俺の家だよ」

ベッドの横に椅子を置き、そこに座る。

「川に流されてるのを見つけたんだ。何があつたか覚えてる？」

優しく聞きたかったが、どうしても声音が冷たいものになるのを自分で感じた。

人間は信用できない。

頭の片隅で常に警鐘が鳴らされているのを感じる。

女性は少し考え込む表情を見せた。

「川……。ローヌ川？」

「そういえばそんな名前だっけ。呼ぶことも無いからはっきり覚えてないけど」

「……今日って何日？　ここってどの辺り？」

どうにも偉そうな態度で少しむっとする。別に感謝が欲しいわけでもないが、気に入らない女だ。

「……梟の十日だけど。ここはローヌ川の下流の近くで、クルーラント側」

一瞬、適当に言ってやろうかと思ったものの正直に答えてやる。

「皇の十日……。まだクルーラントね」

そついうと女性は勢い良くベッドから降りた。

「そう、分かったわ。ありがとう」

「もう行くのか」

思わず顔が綻びそうになるが、必死になんとか抑える。

「ええ。急いでるから」

女性は家の扉を勢いよく開けて外に飛び出していく。

今度こそ口元に笑みが浮かぶ。自分から出て行ってくれたのだ、有難い。

ほつと一息つくと食事を再開するべく、家の外に出る。

すると勢い良く飛び出して行っただはずの女性が、家のすぐ前で固まっていた。その視線の先には彼女の黒い服が干してあった。

どうしたのかと思いながら後ろ手に扉を閉めると、女性がギギイという音を立てながら首をこちらに向けた。

「……あの服は何ですか？」

指を刺しながら訊いてくる。心なしか声が微妙に震えている気がした。

「あの服？」

「……あの黒い服。あなたのですか？」

どうにもよく分からないことを訊く。

「あれは君のだろ。見て分かんない？ 大体、君の着てる服も俺のだし」

彼女は視線をゆっくり下げて、自分の服を見直した。
女性是完全に固まった。

「……どうかした？ 俺の服が気に入らないなら、自分の服着て行けば？」

自分でもちよつと冷たいかなと思ってしまうような声音。
親切で変えてやったのに、その態度は無いだろう。

彼女が俺を真正面から見据えるようにして、口をパクパク動かす。
声は出ていない。

「……俺、口読めないから声出してくれる？」

彼女の口が止まり、一度大きく深呼吸する。そして意を決したような視線を向けてきた。

「……見たの？」

「何を？」

「何をつて……その、……私の体」

「ああ、見たけど？ そうじゃないと着替えさせられないし」

「何考えてんの！ 気くらい使いなさいよ！」

と、耳鳴りのするような大声を発し、俺は耳を両手で塞いだ。彼女の顔は茹ダコのように真っ赤だ。

「……うるさいなあ。そんな大声じゃなくても聞こえるよ。濡れた服のまま寝かせとくわけにもいかないだろ」

「そういう事言っでんじゃないのよ！ 人の裸見なんて何よ、その態度！」

さすがにむかつ腹が立つ。

「助けられなくて、お前の方こそなんだよ。あのまま放っておいたらお前死んでたろうが」

「そんなの、私の裸見たのでチャラよ！ チャラ！ むしろ私の方が払いすぎたくらいじゃない！ 信じらんない！」

「ああ、そうかよ。もう何でもいいから、とつとへ行けよ」

もはや苛立ちも隠せない。隠そうという気もなくなっていた。とにかく彼女を立ち去らせることが肝要だった。

顔を真つ赤にした彼女はすぐに立ち去るかと思ったが、真つ直ぐに魚を焼いていた焚き火へと向かった。

黙って焚き火の傍に座ると、少し焼きすぎた魚をほお張り始めた。

「おい！ それは俺のだぞ。勝手に食うな！」

「いいじゃない、こんなにあるんだし。お腹空いたから貰うわよ。それに私の裸見たでしょ、これくらいじゃ足りないわよ」

あまりの言い様に後ろから殴り飛ばしたくなったが、震える手をなんとか押さえて、深呼吸する。

何とか自分を落ち着かせると彼女の前に座り、あまり食べられないうちに食事に取り掛かる。

食べ終われば出て行ってくれるのだ、それまでの我慢と思い定めた。

彼女がじつとこちらを見つめる。顔はまだ赤い。

「……そっぴゃあんたの名前、聞いてなかったわね」

「……カルシア」

「私はリーラね、よろしく」

すぐに分かれるのによろしくも無いものだと思い、俺は返事をしなかった。

「それにしてもこれ、まずいわね。食べれないほどじゃないけど」

我慢できるかどうか、自信が無くなってきた。

02 逃亡開始

「……あんたって私の事情、全く聞かないのね」

すでに魚を食べ終えたというのに木にもたれて座り、未だにここにいるリーラが不思議そうに訊いてきた。

俺からしたらそんなことより、何故まだ居るのが不思議でならない。

こちらもすでに食べ終えて、今は剣の修行をしている最中だった。彼女はその様子をじっと見ている。

「訊いたところで仕方がないから。リーラはもう行くんだろ？」

「そのつもりだったんだけどね」

さっさと行けと遠回しに言ったのだが、リーラには分からなかったようだ。

横目で見ると、指を組みながら人差し指で指遊びをしている。

「どうして行かないんだ？」

「……連れとはぐれちゃってね。よくよく考えたら、道、分からないのよ……」

「迷子ってことね」

呆れた、それでじっとしていたわけか。おまけに素直に案内を頼めずにいたようだ。

散々悪口に近いことを言っていたから気まずいのかもしれない。横目でリーラを見ると、やはり気まずそうな表情をしていた。

「……はあ、仕方無いなあ」

いつまでもここにいられても困るので振っていた剣を止めて鞘に納めながらそう言っと、リーラの表情が目に見えて明るくなった。

「ホント？ 連れてってくれるの？ ありがとう！」

とはいえ、まだ連れて行くとも言っていないが、リーラの脳内では俺が連れて行くことに決まったようだ。ため息を一つ吐き、彼女に近づいていく。

ヒュッ。

小さく鋭い風を切る音が聞こえ、考えるよりも先に体が動いていた。

視線を左から右へ横切ろうとする何かを、鞘から剣を抜いた勢いで下から斬る。飛んできたのは矢だった。

それも真っ直ぐにリーラを狙っていた。

狙われた彼女自身は何が起こったのか分からず、キョトンとしている。

「こっちに！」

彼女の手を握り、飛んで来た方とは逆の方向の森へと入る。

ここだと弓矢はよっぽどの名手でも無い限り使えない。

「ちょ、ちょっと、どうしたのよ？」

リーラは今起こった出来事すら把握出来ていない様子だった。

「今、矢で狙われた！ お前、何に巻き込まれてるんだよ」

「え！ ホントに？ こんなに早く来るなんて……」

彼女の声音に明らかな恐怖の色が混じった。
いかにも気の強そうな人だったので意外にしか思えない。

「お前に敵は多いのか？」

「どういうこと？」

「どうもこうも無い、早く！」

自然と声が少し大きくなる。

「お、多いわよ……」

声音が弱々しい。彼女の呼吸も乱れ始めている。あまり長く走れ
そうに無いことは簡単に予想できた。

「分かった。——っ！ 危ない！」

慌ててリーラの腕を思い切り引っ張る。

「きゃっ！」

リーラが痛そうな悲鳴を上げたが、多少の痛みぐらいは我慢して
もらわないとならない。

森の中だというのに、正確にリーラめがけて矢が飛んできたのだ。
偶然かと思ったが、すぐに頭の中でその考えを否定する。

ここは最悪を考えた方がいい。森の中でも正確に狙える弓の名手。
背後を振り返ると、背の高い男が走りつつ弓に矢をつがえている
ところだった。

さすがに走りながら矢を射ることはしないだろうが、やってしま

いそうな雰囲気放っていた。

「こっちに」

進んでいた方向をほとんど直角に右へと変える。

敵が奴だけで無いなら挟み撃ちぐらい考えているかもしれない。

「こっちに行くのと逃げれるの？」

「あのまま行くよりはマシだ」

多くの説明をしている時間も無い。とにかく今は逃げ切ることが重要だった。

どんどんと、より木の多い森の奥へと入り込んでいく。

空を見上げると、雲ひとつ無い快晴。

暗くなればどうにでもなるだろうが、まだ昼にもなっていないなかった。

おまけに太陽が隠れてくれることも期待できそうに無い。

とにかく今は森の奥、アミシラ樹海へと進んでいった。

かなり走り続け、どうにかあの弓の使い手は巻いたようだった。

かなり木が茂った場所まで来てようやく足を止める。

「この辺りまでくれば、とりあえず大丈夫かな」

適当な木にもたれかかる。さすがに走りっぱなしで疲れた。呼吸が少し荒くなっている。

リーラはいえ木にもたれて座り込み、もう動けないといった様子だった。

とはいえここが安住の地というわけでもない。しかも昼を少し過ぎた頃でしかなので、まだまだ危険だ。
しかし少し話す程度の余裕はある。

「疲れてるとこ悪いけど、何があつたか話してくれる？」
「……ちよつと、……待つて……」

呼吸が全く整つておらず、確かにこれでは話せなそうだ。
じつと彼女が呼吸を整えるのを待つてやる。

「はあ、はあ、はあ……」

一緒に走っているうちに気付いたが、どうにも思っていたよりも歳が若そうだった。

二十ぐらいかと思っていたのだが、おそらく十代半ば。

「ふう……、もう大丈夫」

「大丈夫なのは分かったから、事情を話してくれ」
「ええ……」

少し逡巡する様子を見せた。

「どうした？」

「……あなたが危険になるから」
「今更それを言うのか」

すでにもう巻き込まれている。まったくもってなんでこんな目に遭っているのか、腹立たしいこと極まりない。

そもそも何故俺はリーラの腕を引いて逃げてしまったのか……
だからといって、目の前で殺されそうなのを放置するという選択

肢も無いが。

「……そうね。だけど、多分信じてくれないんじゃないかなって……」

「話してもらわないと信じようも無いんだけど」

「……そうね、うん。分かってる。でもごめん、話せない」

自然と舌打ちをしてしまった。リーラの言い様だと喋ろうか迷っているという感じだったが、この状況で黙られても困る。

「話してもらえないと対応のしようが無いんだけど」

もはや声音に怒りが混じるのを抑えられなかった。

彼女に会ってから不満ばかりだが、そろそろ我慢の限界に近い。

「君は一体どうしたいんだ？ 俺をどうさせたいんだ？」

「……ごめんなさい」

珍しく悄然とした様子で謝られ、振り上げた拳のやりどころを無くしてしまった。

「……分かった。詳しく話さなくていいから、状況だけ簡単に話して欲しい。リーラはどうしたくて、あいつは何なのか」

「……私は今、狙われてるの。だから国外に逃げようとしたんだけど、川に落とされちゃってね。さっきの弓の男は多分私を狙ってる奴の部下」

ようやく事情を話し始め、怒りが多少収まる。

「ストリアにでも行くこうとしてたの？」

「ええ。さらにその向こうのファサリアまで行こうと思ってるわ」

事情は分からないなりに、多少は察した。つまりこの娘は国の中枢に関わる人物の親族なわけか。

国外に逃げるような理由なんていうのは、犯罪者が政争に敗れるかのどちらかぐらいしかない。そして犯罪者なら身柄は狙われても、命は狙われない。

「ふうん。となるともう国境は封鎖されてるかな」

「え？」

「泳いでいくのが速いんじゃないか？　ちょっと大きな川だけど、泳いで渡れないことも無いし」

国境にされるだけあって、かなりの川幅があるが流れはそう強くない。

だが言いながらも、人間にはきついかなと思ったが、予想にたがわずリーラは不審気な顔で首を横に振った。

「あんな川渡るなんて、とても無理。それに私泳げないし」

「……川に流されてて、良く助かったな」

気を失っていたことと、偶然顔が水面から出ていたのが幸運だったのか。

「まあいいや。とにかく夜までなんとかしようか」

「夜？」

「夜になれば何とかなるから。策はある」

「さく〜？」

リーラは驚いた表情をした。というより不審気な表情だ。俺が考

えたのは策というほどのものでもないし、確実にうまくいくかもしれないが、できるだけ自信のあるように言う事だ。

自信が無いと思うより、自信があると自分で思い込むために。

「本当にあるの？」

「たいした事はない。ようはうまく逃げようって事だから。それをやろうとしたら太陽が出てる間は無理なんだよ」

「へ〜……」

どうにも気の抜けた返事だ。信じているのかいないのか、よく分からない。

もしかしたらおそらく彼女は状況を正しく把握仕切っていないのかもしれない。

リーラが犯罪者でなく政争で負けた要人の家族であり、なおかつ国の中枢にまで関わるような要人だった場合、大体の場所がばれている今、かなり追い詰められている状況になる。

全て仮定で成り立っているが、彼女の経歴を聞いていない現状では、最悪を想定して行動するしかない。

巻き込まれた形だったが、ここまできたら助けるつもりでいる。だからこそ今ここで、彼女の状況を伝えようとした。

03 持久戦

リーラに近づくと、ふっとした違和感。

俺はリーラに勢い良く飛び掛かり、そのまま覆いかぶさるようにして押し倒した。

「え？！ ちょ、ちょっと！ 何してんのよ！ バカ、変態！ どきなさい！」

腕の中でリーラが必死に押しのけようとしてくる。

「静かに！ 狙われてる！」

耳元で注意すると彼女の押しのけようとする力が弱まり、体が強張るのを感じた。

「……ホントに？」

小声で確認してくる。不審気な声音だったが、緊張しているのか、少し震えている。

「ああ。リーラはこのまま伏せていて」

彼女が小さく頷くのを確認してから離れ、ゆっくりと周りを見渡しながら、いつでも動けるように頭を低くして屈んだ状態にまで体を持っていく。

目の端で彼女の頬が赤らんでいた気がしたが、すぐに意識から消えた。

……確実に誰かがこちらを見ている。

リーラを大急ぎで伏せさせたためか矢は飛んでこなかったが、何となく先ほどの男だろうと予想していた。

さすがにうつ伏せになった人を射るのはあの男でも難しいはず。そう思いたい。

鬱蒼と茂る森の中を相手の気配をゆつくりと探っていく。

居ない。

いや、どこかに居るのは分かる。だが位置がつかめない。

……仕方無い。

ゆつくりと、注意しながら立ち上がる。

「ちよつと、あんた！ 立ったら危ないじゃない！」

リーラが小声で心配してくれるが、男の位置を掴むにはこうするしかない。

つまり、自分を餌にして相手の位置を探る。もし射てきたら、それで十分場所を特定することが出来る。とはいえ先ほど飛んできた矢を切り落としただけに、射てくるかどうかは微妙なところだ。

それにしても三十メートルほどしか見えない中で、これほど気配を消して近づける者を久しぶりに見た。

じつと奴の攻撃を待つ。

リーラも異様な気配を察して、もう喋りかけてこなかった。

そよ風が吹き、木々がカサカサと小気味のいい音を立てた。

鳥の歌う声、獣の駆ける足音。

森の息遣いすら聞こえるような、静かで穏やかな空間。

段々と無駄な雑音が耳の奥から遠ざかっていく。

とうとう何も聞こえなくなり、しんとして小さな異音を聞き逃さないような状態になった。

全ての五感の集中を高め、ある種の第六感まで高めていく。そして、待つ。

攻撃が来るまで、相手がミスをするまで、待つ。

分かる。

俺が緊張しているように、奴が緊張しているのが感覚として分かる。

分からないのはその位置。

持久戦だった。だが短期決戦になることは目に見えていた。

先に集中の切れた方が負ける勝負。

俺はこの周囲全域を探り、相手の位置を探る。奴は物音の一つも立てないように、俺の集中が切れるのを待てばいいだけだった。

しかも俺はリーラに矢が行った時の事も考えて、さらなる集中が要求される。

どちらの集中が長持ちするかなど一目瞭然。

小さく、ゆつくりと、息を出来るだけ長く吐いていく。

集中力が続く間に勝負を決めなければならぬ。

俺は体の中にある魔力にそろそろと手を伸ばした。

これほど集中力の要求される中、魔力を操るのは恐ろしく厳しいものがあるが、しなければ負ける勝負だ。

ゆつくりと基礎魔力のうち、風の魔力と土の魔力を少しずつ取り出して混ぜる。

風の魔力を使い、土の魔力を周囲三十メートルの位置、八方向へと運ぶ。

慎重な作業だった。

あの男に余裕を与えることは出来ない。常に集中力を最高まで維持し、位置を探っていく。

同時に一種類の魔力で別の魔力を飛ばすという荒業を行っていた。集中が途切れないように、ゆつくりと作業をこなしていく。

まず風の魔力で自分を中心とした八方向へ「流れ」を作る。

徐々に伸ばしていき、目標まで達した時には顔を汗が流れるのを感じた。

周囲からは未だ男の気配を感じるものの、位置はあいかわらず掴めない。

風の魔力で作った流れの上を土の魔力を移動させていく。
ゆつくりと、着実に、出来るだけ早く。

俺の集中力がいくらかも持つとは思えない。

焦りを感じそうになるのを抑え、冷静さを保つ。

肝要なのは自分を信じることだ。

それこそが一番の勝利への道筋だと信じている。

全ての飛ばした土の魔力が、目的地に辿り着いた。

この魔力は言わば種だった。魔力を吹き込むことで芽吹く種。

大きくゆつくりと、集中力を切らすことなく、深呼吸する。

腹に力を込め思い切り、

「ハッ！！」

魔力を込めた。

とたんに土の魔力が一度に増幅される。それぞれの周囲の草木が急成長を始め、巨木を作り上げていく。周囲に枝を伸ばしつつ、木の密度を大きく上げる。

太さが他の三倍はあるような木、そして高さは目立たないようにほとんど変わらない高さの木が八本。

鳥が飛び、動物が走り、木々が喚く。

森そのものが突然の仲間の成長に驚いていた。

そして驚いたのは何も森ばかりではない。

人も驚いていた。

リーラも目を丸くしていたし、あの男も驚いて気配を断つことを忘れてしまっていた。

七時の方向。

集中を維持していたため、問題なく捕らえた。

すぐに奴に向かって走り出す。

男も俺に気付いた。一瞬で弓を構え、射て来る。

後ろでリーラが立つ気配がした。つまり矢の射線上。俺が避けられ

ばリーラに確実に当たる。

すでに矢との距離は三メートルも無い。真っ直ぐに額へと向かってきている。

妙にゆっくりと飛んでいる矢だった。

残り二メートル。一メートル。

体を斜めに沈め、避ける。

矢の狙いが俺からリーラへと変更された。矢は頭の右上を通過し、一つの命を奪おうと進む。

瞬間、鞘から剣を抜いた。

抜いた勢いのまま、剣は右上へと移動し、矢を切り落とす。

男が顔を顰めたが動揺は無さそうだった。一度見せた技だ、予想はしていたのかもしれない。

一気に近づいていきながら、剣を持ち直す。

男は弓を捨て、佩いていた剣を抜いて構えた。十分、その道でも達人だろうと思える構え。

最後はさらに地面を蹴る足に力を込めた。

男の剣が横に振られ、俺の首筋を正確に狙う。一撃必殺を狙った攻撃だった。

頭を僅かに下げる。頭上を男の剣が風を切りながら通り過ぎた。がら空きになった男の全身。

その首へと真っ直ぐ剣を伸ばす。集中しきった神経には自分の動きでさえゆっくりとした動作に見えた。

「信じられない……」

何が信じられないのか。今起こった一連の全てが信じられなかった。

急にあいっぴ押し倒されたと思って焦っていたら、耳元で狙われ

てると囁かれて、言った本人は立ち上がって棒立ちになるし、しばらくそのままだと思ったら急に大きな木がいくつも生えてきて……あれは一体何……？

その後、あいつが追っ手に向かって行っただけ、あっという間に首に剣を突き立てて終わってしまった。

だからあの二人の直接対決より、急に巨木が現われたことが不思議でならない。

あいつが少し古そうな剣に付いた血糊を振り落としながら近づいてきた。

「ねえ、あんた……、何したの？」

どうしても訊かずに入られなかった。あいつは額に汗を浮かべながら、剣を鞘に戻した。

「何？ 魔術を見るのは初めてだった？」

「魔術？ あれが？ とつくに滅んだ、あれ？」

もう何百年か前に滅んだと聞いていたけど。

もしあれが本当に魔術だとしたら、これは大変な事だ。今や魔術を使える人は誰もいないと言われているのだから。

「別に滅んじやいないよ。使える人間が滅っただけで。それより、早く移動するよ」

「え？ なんで？」

「何でって……、それを訊きなおすの？」

嫌そうな顔をされ、さらにはため息まで吐かれた。

「今の騒ぎが誰にも聞こえなかったと思ってる？」

「あ……」

言われてみれば、これだけ大きな音を立てておいて位置がばれないはずがない。

「まったく……。理解した？　なら行くよ」

「え、ええ。あ！　ちょっと待ってよ！」

先に歩き始めたあいつを慌てて追いかけた。

それにしても取り立てて特徴の無いような彼が、私よりいくらか年上でしかなさそうな彼が、魔術と剣を使いこなすことは驚きを通り越して、一種の恐怖にすら感じられた。

04 北へ向かって

ようやく陽が暮れ始めてきた。

敵らしい人物を見かけること十数回。魔術を使った簡単な罠を作ること約三十回。それもようやく終わりを告げようとしていた。

俺は木にもたれて、荒くなっていった呼吸を整える。

結局あの弓矢の男が一番きつかった。あれで体力を取られすぎて、体が少し重い。

「足、大丈夫？」

座り込んで痛そうに足のふくらはぎを揉んでいるリーラに声をかける。

「ん、なんとか……」

声も弱々しい。疲れと痛みですっかり参っているようだった。

同じように俺も疲れていたが、今からが本番だった。とても休んでいられない。

今日のことを振り返ると思わずため息がでる。

俺は何でこんな目にあっているんだろう。いつも通りに釣りに行っただけのはずなのに……

あのおそらく達人を殺してしまったことで、下手をすると俺まで手配されたかもしれない。敵も見つかれば殺しつつ逃げてきた。どう考えてもまずい。

これ以上考えると本気で落ち込みそうなので、頭を振り、考えることをやめて気を取り直し、

「あと少し、頑張れそう？」

「……うん。大丈夫」

あまり大丈夫そうではない。とはいえ、ここからどの程度まで急ぐことが出来るかどうか。

「……言い忘れてた。今日逃げ切ったら髪、切ってもらっよ」

「……髪？」

「長いからね。目立つんだ」

「そう、分かった」

特に抵抗も無さそうに言った。本当に気にしていないのか、疲れで正常な判断能力が無いのか、判然としなかった。

「そろそろ行こうか。手、掴んで」

「……うん」

素直にいう事を聞く。やはりこれは判断能力が失われていると考えた方がいい。

リーラの手をしっかりと掴み、魔術を使う。

今度は基礎魔力の一つ、闇の魔力。

「いい？ 今、俺達の姿を見えなくしたから。声もある程度は抑えられるけど、出来るだけ小さくね」

リーラは黙って頷いた。

いよいよ体力がまずいのかもしれない。

彼女の手を引っ張り、森の出口へと向かった。

アミシラ樹海の北側。

途中からリーラを背負い、森の中に居た兵の何人かを闇討ちしつつ、ようやくここまで来た。すでに綺麗な満月が出ていて、夜の十二時を回った頃になっている。

目の前に四人の赤い服を着た兵士達がいる。目的の物である馬も人数分あって都合がいい。

「リーラ、大丈夫？」

「……………」

もはや返事も無い。

さすがに無茶をさせすぎたか。

「リーラ、ちょっと降ろすよ。しばらく待ってて」

すっかり気を失っているようだったが、一応声をかけてから木の根元に降ろした。

兵から死角になっているが、手は念のためリーラに置いたままだ。木の陰から兵を覗き込む。

あの兵の位置から良く見える場所で、かつ殺しやすい場所。できれば森の奥のほうが好ましい。

森の中にそんな場所があるか、ざっと目で探してよさ気な場所を見つけた。

風の魔力を使って火の魔力を飛ばし、その場所で小さく空間を燃やす。森に燃やしたら大変なのでそこは注意しつつ。

それでも弓の男と戦った時と比べて集中しなくていい分、随分と楽な仕事だ。

うまく兵が火に気がついたようで指を指した。火の魔力を断ち、燃えていた空間から火が消えた。

兵達が訝しんでいる。少し話し合った後、二人が森の中に歩を進

めていく。

思わず笑みが零れた。予想以上にうまく動いてくれている。待ち伏せするために先ほど燃やした空間の近くまで移動する。

兵達が近づいて来た。俺にはまったく気付いていない。

ある程度まで引き寄せ、その首をそれぞれ一閃で切り落とし、再び隠れた。

じつと隠れた場所から残った兵を凝視する。場合によっては面倒な手順を踏まなくてはならない。

そのまま待ち続けているとまた二人やってきたので、同じように首を切り落とした。

うまく行き過ぎて逆に拍子抜けだ。最初の二人が戻ってこないことを怪しんで、様子を見に来るとしても一人でだと思っていた。最後の一人は気を失わせてから森で殺すつもりだったが手間が省けた。場合によっては二人を同時に気を失わせなければならぬとも思っていたのに。

とにかく、邪魔な兵は全員片付けた。

リーラを再び背負い、馬の所まで行く。

三頭は森の中に逃がし、一頭だけ手元に残した。

馬に乗り、リーラを前に座らせるのは少々骨だったが、何とかなつた。

「さてと、行くか」

腕の中の頭一つ分ほど小さいリーラに声をかける。

リーラのいい臭いが鼻腔をくすぐり、多少戸惑いを覚えたが振り払うように正面を見据え、馬を駆けさせた。

「……ん」

「起きた？」

リーラが少し身じろぎしたので、声をかけてみた。

「……ここは？」

「アミシラ樹海から北に進んでるとこ。そして今は馬の上。時刻はそうだな、大体午前三時つてところかな」

「……アミシラ樹海の北？ それって国境から離れてない？」

不安とも不審ともつかない弱々しい声音を出す。

彼女を突き出して俺だけが助かるという手もあるから、不安になるだろうし不審も感じるのは当然かもしれない。

「離れてるよ。ローヌ川は元々国境つてこともあつて船を着けることが許されて無いんだ。だからあの周辺に船は無い。国が出してる定期便以外はね。後は国境を渡るには橋しかないけど、どちらも警戒されてたら渡るのは不可能だよ。船を作るって手もあったけど、さすがに追いかけてらる状況で不可能だし」

「……そう」

今後のことを訊かれるかと思つたが、特に喋る様子も無く俺にもたれてくる。

顔を覗くとどうも顔が赤い。

「……どうした？ 疲れたのかな？」

「……うん」

少しだけ呼吸が荒くなっている。

疲れが取れていないというよりもこれは……

リーラの額に手を当ててみて、思わず舌打ちしてしまった。

「酷い熱だな。悪い、無理をさせすぎた……」

よくよく考えてみれば、リーラの逃避行は昨日今日始まった出来事ではないはず。疲れがたまっていたのかもしれない。

「……あんたのせいじゃないよ。私が巻き込んだんじやっただし」

「どこかで休ませないとまずいかな、これは」

「大丈夫よ、これぐらい」

「いや、どこかで休んで行こう。幸いにも当てはあるし」

「でも……」

「何より、この状態で逃げるのは不可能だよ」

どこかで倒れられても困るし、背負っていくわけにもいかない。

馬は目立つからどこかで捨てるつもりなので、旅はより厳しいものになっていくのは間違いない。

「だからしつかり休んでもらう。いいね？」

「……うん」

リーラが大人しく頷いた。とりあえず納得はしたようだ。

それにしてもどんどんと状況が悪化している気がするが、気のせいだろうか……

「少し急ぐよ。俺の魔力もそろそろ切れるから」

「……魔力が切れるって？」

「姿を見えにくくしてるんだよ。隠密とか言われる魔術だけどね。方向を変えたことがばれたらまずいから、ずっと使ってるんだ」

これほど長時間、魔力を行使したことはここ数年無かった。

魔術の研磨は続けてきたが、そろそろ辛い。

魔力の残量を考えると陽が登るまで使えるかどうかという微妙なところだ。

それどころか、俺の体力も目的地につかまでもつかどうか。表に出さないようにしているが、かなり辛い。

「……そうなんだ。……ごめん、巻き込んで」

「……今更だね。もういいよ、どうしようもないし」

本当にどうしようもない。

反射的に助けてしまってから、実に苦労が続く。助けたのは昨日の朝のことだというのに。

何でこんなことになったんだろうと考えていると、リーラが赤みがかった顔を上げて、下から俺の顔を覗きこんできた。じゃれついた様な動作だったが、黒い瞳にはどこか真剣味がある。

「どうした？」

「……あんた、私のこと売って自分は助かろうとか、考えないの？」

「……私なら多分、そうするよ？」

気が弱っているのか、弱々しい言葉。

そして軽く言おうとしているが、不安に満ち満ちた言葉。

やっぱりその不安が付きまとっていたのか。

安心させるように少しだけ微笑む。

「しないよ、そんなこと。……追われてるのはリーラが悪いわけじゃないんだろ？　なら売るなんて事はしない」

——追われているのはリーラが悪いわけじゃない。

これは一体誰に言っているんだろう。

リーラに言っているのか、それとも……自分自身に言っているのか。

リーラしばらく下から俺の目を覗き込んでいたが、やがて再び正面を向いて俺にもたれかかってきた。

「……ありがとう。……カルシア」

極々小さな声で呟いたリーラの声はしっかりと俺の耳に届いた。

05 山中の家

もうあと一時間もすれば朝日が顔を出そうかという頃になってしまった。

右手のかなり遠いところには村が見えるが、静かというか、時間が時間なので人が見あたらない。単に遠くて判断出来ないだけかもしれないが。

馬はこの場所に来る前に逃がしておいたが、リーラを背負っているため目立つことは変わらない。

リーラの呼吸も、俺の呼吸も荒くなっている。どちらにしろ目立つなら、馬に乗ってくればよかったと多少後悔した。

だがそんなことよりも何よりまずいのは、もう隠密も使えず、魔力も完全に切れたという事だ。

この状態ではとても人前に出られない。

背中中のリーラの苦しそうな呼吸を聞きながら村を掠めるようにして進み、すぐ目の前の小さな山を登って行く。

疲れきった体にはさすがに辛かったが、急な斜面を三十分ほど登り、山の中腹の開けたところまで呼吸をさらに乱しつつ到達した。

もう俺まで倒れてしまいそうだった。頭がクラクラしている。汗が滴り落ちるのを感じた。

開けた空間に来た時、目の前に現われたのは、どこかローヌ川のほとりにある自分の家にも似たような家。

真っ直ぐに玄関に向かい、俺はその扉を無遠慮に叩く。ノックというにはかなり荒々しい。

この時間ならもちろん寝ているだろう。起きてくるまでとにかく何度も叩く。

「——どちらさんすか？　こんな朝早くに……」

しばらく叩き続けていると、家の中から眠そうな声が響いた。

「俺だよ、カルシア。悪いけど入れてくれ」

「……兄さん？　ちょい待ってて下さい」

とたんに家の中がドタドタと慌しくなり、少し待つと扉が開いて、一人の青年が顔を出した。

どこかのほほんとした黒髪黒目の青年だが、山暮らしのためか、かなり締まった筋肉をしていて、まるで野性の狼のような目つきをしている。

俺の姿を確認した青年は目を丸くした。

「本当に竜の兄さんじゃないっすか。どうしたんです、こんな時間に。しかも美人の娘さん背負って」

「セナク、悪いねこんな時間に」

「いや、竜の兄さんならいつでも歓迎っすけどね。でも本当にどうしたんすか？　魔力空っぽじゃないすか。そんな状態の兄さん、今まで見たこと無いっすよ」

「ちよつとね。それより『竜の兄さん』ってのはやめてくれ」

「俺にとっては兄さんは兄さんっすよ。あ、中どうぞ」

セナクが体を横にし、中に入るように促してくれる。

「ならせめて『竜の』ってつけるのはやめてくれ。お邪魔するよ」

中に入りつつ言う。

家の中は、物はほとんど置いていない。机や椅子のほか、ノコギリやら弓矢やらの、山で暮らすための道具が綺麗に置いてある以外に、この場所に似つかわしくない使い込まれたような剣が壁にかけられている。

「お前のベッド借りるよ」

「いいっすよ、どうぞ」

セナクの了承を得て奥の寝室へと入り、そのベッドにリーラをゆっくりと寝かす。

「兄さん、この凄い可愛い娘、誰なんすか？」

「さあ？」

「さあつて……」

不思議そうに視線をやってくるが、俺も聞いていないのだから仕方無い。

俺が本当に知らないと判断したのか、セナクは肩をすくめてまたリーラに視線を移し、心配そうな表情を作る。

「まあ何でもいいすけど、この娘しんどそうじゃないすか？」

リーラの顔は赤みがかっていて、呼吸も荒く汗も酷い。

「過労から来る熱だと思う。解熱剤とか無い？」

「確か薬草があったはずなんで、煎じてきます」

そう言つとセナクは寝室を出て行こうとした。

「あとは水とタオルも頼む」

セナクの背中に向かって言うと、はいという元気な声が返ってきた。

部屋を出て行った彼は、向こうの部屋でガサガサと探す音を出し

ていた。

「はあ……」

セナクが部屋を出ると、大きく息を吐いてベッドの横に座り込む。ドカッという自分でも驚くような音がしたが、セナクには聞こえていなかったようで、相変わらず探している音が続いている。

リーラをベッドに寝かせ、セナクに薬を頼み、一気に気が抜けた。今日、——いやもう昨日か。全く酷い一日だった。

いつも通りに釣りに行っただけだったのに、どんどん自分の意志とは無関係に何かに、おそらく政争に巻き込まれていくのを感じた。

だからといってリーラを助けたことが間違いだったとは思わないが、どうにも自分の運命の数奇さというか、呪われているんじゃないかとまで思ってしまう。

面倒な場所に嫌気がさして、あんな場所で隠居のような生活を送っていたというのに。

もはやあの場所に戻ることも出来ない。

あの時、さつさと引き揚げていれば……

そう思う一方で、高揚している自分も感じていて腹が立つ。

戦いに嫌気がさしたのに、戦いに高揚している。巻き込まれていくことを心のどこかで望んでいる……

おまけに人間を嫌っていたはずなのに、こうして人間を助け、人間に頼っている。

このままだとまずい気がする。どこかでリーラと分かれた方がいいかもしれない。

リーラを助けたことに後悔は無い。一方で釣りをやめなかったことに対しての後悔は酷いものを感じている。

一体全体、どうなっているのやら。自分の中が矛盾だらけだ。すぐに釣りをやめていれば……

思考が同じ所を何度も行き来する。

しばらくそうやって昨日一日の事を考えていると、扉が開く音と共にセナクが姿を現した。

手には木でできたコップと水の入った桶にタオルがかかっている。

「兄さんも体調崩してるんすか？ しんどそうすね」

セナクが心配そうに訊いてくる。

心配をかけないように、俺は立ち上がろうとしたが、……足に力が入らない。

それでも顔を顰めながら、手をベッドにつき、無理に力を入れて立ち上がる。

「俺は大丈夫……。リーラの世話を……。頼んでおいて……。いいかな？」

声がかすれてうまく喋れない。

「リーラってこの娘のことっすね？ 任せて下さい。それより兄さんにも休んでもらわないと」

セナクが手に持っていた薬と桶をベッドの傍に置くと、俺を支えようと手を出してきた。

触られることへの僅かな嫌悪感。

思わず顔を顰めてしまい、慌ててセナクの顔を盗み見る。

「やっぱり全然大丈夫じゃないっすよ。早く横になって……。ああ！でもベッドも布団ももう無いっす。あとは毛布ぐらいしか……」

どうやら別の意味で取ってくれたらしく一安心した。さすがに頼

っておいてこの感情を察せられたくはない。

「……その壁まで、連れてってくれるかな」

部屋の隅を指差して申し訳無さそうにしているセナクに頼む。もはやこの動作だけでもかなり辛い。

セナクはわずかに不思議そうな顔をしつつも、部屋の隅まで連れてきてくれた。

ほんの三メートルほどの移動でしかなかったのに、セナクの肩に捕まっつてようやくという有様だった。

「ここで一体どうするんすか？」

「俺はここで寝る」

セナクの肩から腕を外し、壁にもたれるとそのままずると座り込んだ。

「こんなところでっすか？」

「ああ……」

座ったとたんに意識が朦朧としてきた。

腰に佩いている剣が鬱陶しくて、腰のベルトから外して抱くようにする。

「でもこんなところじゃ——」

「セナク……」

何か言いたげなセナクを遮る。

「俺のことより……、リーラを頼む……」

重たいまぶたを無理に開けて、じつとセナクの顔を見る。
やはり何か言いたげだったが、

「任せて下さい」

と、はつきりした声音で答えてくれたのを聞き、俺は安心して意識を失った。

06 家の中で

妙に体が重い。だが熱っぽいわけではない。

疲労で体が疲れきっているのが自分でも分かった。

ゆっくりとまぶたを開けると、掠れた部屋が目飛び込んできた。ぼんやりと何も考えず、部屋を見回すと、体にかかっていた毛布がずれ落ちる。

段々と焦点が合ってきて、徐々に頭の中がはつきりし始める。

ここはセナクの寝室。

一つある窓から陽光が差し込んできて目に痛い。

ゆっくり立ち上がる。体がギシギシと嫌な音を立てたが、どこかの調子が悪いというようなことは無さそうだった。

剣を佩きなおしながらベッドの上に視線をやると、リーラが静かな寝息を立てていた。

顔色がだいぶよくなっていて、とりあえず安心しほつと息をつく。

……最初に会ったときといい、リーラはずっと寝ている気がする。彼女から視線を外し、起こさないようにゆっくりと部屋を出ると、セナクが椅子に座り転寝をしていた。

ベッドをリーラのために使ったので、セナクも寝る場所を無くしてしまったことに気がついて、居心地の悪い心もちがした。

辿りついた時はそこまで考える余裕が無かった。

今起こすのはさらに後ろ髪を引かれる思いだったが、起こさないわけにもいかず、セナクに近づいていく。

そして体を揺するうと手を伸ばすと、触れるより先にセナクが目を開けた。

「あ、兄さん。おはようっす」

のんびりとした挨拶をしてきた。起きたばかりというのに寝ぼけ

た様子も見せない。

「おはよう。悪いね、ベッド使わせてもらって」

言いつつ、向かいの椅子に座る。

「いやいや、兄さんのためとあればそれぐらい。……でもあの娘、一体誰なんすか？」

「聞いてないから俺も知らないよ。どうやら言いたくないみたいだ」
「へー、何か訳ありなんすかね？」

「だろうね。俺の予想だと、政争に負けた役人の娘ってところだと思う」

「せいそう？ 自分には縁の無い話しっす」

目を丸くして言うセナクに、思わず苦笑いを浮かべてしまう。

「そうだね、俺にも縁がないよ」

セナクが一頻り笑い声をあげたが、急に真剣な表情を作った。

「ところで兄さん。その髪と瞳、どうするんすか？ 俺としてはその碧い髪も、緋色の髪も結構好きなんすけどね」

じつと俺の目を覗きこみながら尋ねてくる。

俺にとっても頭の痛い問題だった。

「魔力がカラだからね、どうしようもないよ。せめて後一日休ませれば余裕もできるけど」

「一日っすか。じゃあ今日一日はここにいろんすね？」

「俺よりもリーラのために三日ほどいようかと思ってるよ。セナク

には悪いけど」

いきなり尋ねてきて、おまけに寝場所を取り、どうにも居心地が悪いが頼るしかない。

「俺は全然いいですよ。三日と言わず、いつまでも大丈夫です！」

「ありがとう。けどあまりゆっくりしている訳にもいなくてね」

「そうなんすか？」

「リーラが追われてるから。多分ついでに俺も追われてる」

「多分ついでですか……。兄さんの魔力が尽きたのもそれが原因ですな？」

「ああ。巻くためにかなり無理した。おかげで髪と瞳の色も変えることができないよ」

「兄さんは今日一日、家の中にいた方が良さそうっすね」

「ところがそうもいかない。そうしたいところだけだね。リーラが知らないんだ」

「……あちゃーって感じっすね」

セナクが手で額を覆ってみせる。

「だからどこかで隠れていたいんだけど、いい場所知らないかな？」

「いい場所っすか？ ん……」

今度は手を顎に当てて考え込んでいる。

「いつそのこと、リーラって娘に話すつてのはどうすか？」

「それは駄目。お前だって、本気で話したほうがいいって思っただいしょ？」

「まあ、そりゃ」

「それだと俺が家を出るしかない。まあ最悪リーラの前だけで魔力

を使うのもいいけど、余裕の無い状態でやっているとうまく魔力が回復しないんだよな」

「そうなんすか？ 初めて聞いたような」

「そうだった？ 言い忘れてたかな。それよりいい場所、どこか無いかな」

もう一度訊いてみるが、あまり期待はしていない。

「一応、隠れられそうな場所は思いついたっすけど……」
「本当か？」

だが予想に反した答えが返ってきた。しかしセナクの歯切れが悪い。

「あるにはあるんすけど……、ちょっとした洞穴みたいな場所なんすけどね」

「何か問題が？」

「熊の巣穴になってるんすよ、そこ」

「なんだ、そんなことか。確かに獣臭くはなりそうだけど」

大した問題でもなくて、多少拍子抜けだ。

「そんなことって……。まあそんなことではあるんすけどね。あ、臭いついたら沢に案内しますよ」

セナクが渋面を作り、いかにも気の乗らなさそうな表情をしている。

「なんでそんなに嫌そうなんだよ」

「いや……、いざという時のための非常食として残してたんで」

「……なるほど、死活問題だね」

椅子から立ち上がりつつ呆れて言うと、つられてセナクも立ち上がる。

「まあ俺の食卓事情のことはおいとくとしても、いいんすか？」
「何が？」

扉を開けつつ訊く。

「いや、兄さんがあの洞穴に行ったら必然的に俺とあの娘だけになるわけで……。一緒にしといて、危険だとか思わないんすか？」
「危険？　なんで？　むしろリーラを一人にしといた方が危険だと思うけど」

「何でって……。そりゃ……。いや、何でもないっす。確かに兄さんの言う通りっす」

呆れたような、投げやりのような言い方で少し気になったが、それよりもリーラを一人でしばらく残すことの方が心配だった。
何も問題無ければいいが。

セナクの案内で二十分ほど歩き、山の窪みになったようなところにその巣穴はあった。

セナクはすぐに近づくようなことはせず、少し遠い高台のようなところから様子を窺っていた。

「あそこが熊の巣穴？」
「そうすよ。割とでかい熊なんで気をつけてください」

目を細めて様子を見ると、窪みのような場所に、ちょうど小さな洞穴のようなものができていた。

中が深いのか、浅いのか。広いのか、狭いのか。外から見る限りでは一切分からなかった。

しかし少なくとも入り口は熊が出入りするだけあって、人が十分入ることはできる。

「それにしてもこんなところにあるもんだな」

「そりゃ山の中つすからね」

「そうじゃなくて。随分とお前の家から近くないか？」

「あ、やっぱりそう思うすか？」

セナクが頭をかきつつ苦笑する。

「実は何度か家まで来たことあるんすよ。鍛錬にも丁度よかったんで、素手で相手してたんすけどね。でもその度に痛めつけてたら、そのうち来なくなっただんで」

「そんなにお前、強かったつけ？ 最後に剣見たのは確か……」

「二年前つす。それで降面倒臭い言われて見てもらえなかったすからね。頑張りやした！」

セナクは誇らしげに胸を張り、俺は苦笑いするしかない。

身を守るのに必要な技術として教えてきたけれど、少し強くなりすぎたようだ。

最後に剣の稽古をつけた時で、かなりの領域に達していたはずなのだが。

剣の技術に加えて素手で熊を倒せるレベルになったというわけか。

「随分と強くなっただけだね」

「師匠がよかつたつすから」

セナクが満面の笑みを向ける。

実に無邪気な、子どもの頃のままのような笑みだった。

「さて、そろそろ行こうか」

洞穴を見据えて言う。

「そつすね。それで結局、どうするんすか？ 殺して寝場所奪うんすか？」

「……お前は俺を何だと思ってるんだよ。寝場所の確保ぐらいでそんなことするか。とりあえずは近づいて様子見かな。それから決めればいいよ。熊も中にいるみたいだし、ちようどいい」

「ちようどいいって何が……、あつ！ 先に行かないでくださいよ！」

高台を飛ぶように駆け降りると、セナクが俺の背中に向かって叫んだ。

07 迷子のリーラ

意識が朦朧としている。体がだるく、上半身を起こすだけでも妙に疲れて少し息切れした。体の節々が痛い。

目であいつの姿を探すが、どこにもいない。

「……カルシア？」

小声で呼んでみたものの、むなしく響くばかりで反応は無い。

うまく動かない体に鞭打ちながらベッドから降りて、一つある扉へと向かい、中を窺いながらそろそろと開ける。

誰もいない。

あいつが近くに居ない……。妙に不安を感じる。

「……ねえ、誰かいらない？」

少し大きな声を出してみたが、相変わらず反応は無い。

部屋の真ん中にある椅子二つが、どうにも誰か座っていたような様子を見せている。さっきまで誰かがいたのか、人のぬくもり、というようなものがまだ部屋に残っている。

周りを見渡すとノコギリに、弓矢。自然と背筋が震える。

壁には剣がかかっていたのを視線の端で捕らえた。

ここは本当に、安全なの……？

どうしよう。逃げた方がいいのか、待った方がいいのか……。

否応にも無く頭にはあの弓の男が浮かんだ。

森の中、射てきた男。逃げる私たちを追いかけてくる男。

そして映るのはあいつが弓の男に喉を突き立てた場面。

その後、追手に追い立てられながらも、私を庇いながら移動する場面。

……私の顔を心配そうに覗きこむあいつの顔。あいつは気付いていたのか、いなかったのか、凄い汗をかいてた。呼吸も乱れてた。それでもきつと、私をここまで運んでくれたんだ……

ならきつとここは安全なんだろう。そう思う。

でもあいつは？ あんなに疲れたような様子だったのに。ここに居ないならどこに？

もはや逃げた方がいいのか、待った方がいいのかという選択から、探した方がいいのか、待った方がいいのかという選択に変わっていた。

部屋の中には寝室への扉以外にもう一つ扉が付いている。

その扉に近づき、開けてみると外だった。森の中のように木が多い。

外に行つたのかな？

何しにだろう、疲れてるはずなのに……

自然と連想されるのは追手が来たのではないかという恐怖。

一度思いついてしまうと、それ以外の考えが一切思いつかなかった。

「……探そう」

恐怖を拭うようにポツリと呟いた。

家の中にかかっていた剣を取ってから外に出る。

探すといつても、そう遠いところまで行くつもりは無かったし、体も重くて、とても遠くにいけそうも無い。

だからこの近くを見て回るだけ。

もしかしたら遠目でも見つけられるかもしれない。見つけれたら安心できるから。

いつの間にかこんなに依存していた自分に驚きながら、森の中へと歩を進めた。

この行動が事態をさらにややこしくさせるとも知らずに。

「……どうしよう」

近くを見て回るだけ。そのつもりで確かに歩いていった。

家の周囲を少し離れてぐるっと回っただけ。十分も歩いていないはず。

なのにさっきの家が見つからない。

そんなに遠くに行ったつもりは全く無い。だから近くに家があるはずなのに……

探し続けてもう二十分ほどになる。

見つからない。

自分のいる位置も全く分からなくなってしまった。

「……なんで見つからないのよ」

思わず愚痴ってしまうが、その声が弱々しいのが腹立たしい。

すでに息は切れ、熱が上がっている気もする。

体はだるく、重い。

それでも歩くしかない。腰の剣が邪魔で仕方ないけど、手放すには心細い。

足を引きずるようにして家を探す。もしかしたらどこかであいつに会えるかもしれないという淡い期待を抱きつつ。

斜面が多くて歩くのに体力をかなり使う。

ここが山の中だということは歩き始めてすぐに気がついた。

馬を捨てたのを覚えているから、あいつはここを私を担いで登ってきたんだ……

それなのにどこに行ったんだらうと、その時は思ったが、今は自分がどこにいるんだらうという疑問に変わっていた。

さらに三十分ほど歩き、立ち止まって正面を見据えた。
体が震え、熱が酷い。呼吸も苦しく、そして寒かった。

気温がどうのこうのではなく、完全に風邪をぶり返してしまったのだ。

汗も酷くて髪が顔にへばりつき、鬱陶しい。意識もはっきりして
いるのかどうか、自分でもよく分からない。

もううずくまってしまいたかった。

だがそれも出来ない。

体が固まってしまつて出来ない。

――何故か。

視線の先にいるあれが原因だった。

黒く、大きな獣。

どう見てもあれは……熊。

しかも目が合つてしまつていいる。表情の分からない顔がじつとこ
ちらを向いている。

走つて逃げ出したかった。けれども体の方が熱と疲れと恐怖で、
いう事を聞いてくれない。

腰の剣は念のためにもつてきたものの、使えるはずも無い。

熊と戦つて相手になるはずも無い。

熊がゆっくりと近づいてくる。それに合わせてお互いの距離が縮
まつていくが、相変わらず体は動いてくれない。後ずさるのがやつ
とだった。

それどころか思考もうまくまとまらず、どうしたらいいのかもよ
く分からなかった。

もういくらも距離が無い。

二メートルはありそうな大きな熊だった。

のそのそと歩いてくるのをじつと見ているしかできない。

私の目の前までやって来た。
その大きな顔を近づけてくる。

「ひゃあ」

小さく悲鳴をあげたが、この大きな黒い生き物は問題とすることもなく、鼻を私の体に近づけてきた。

もはや頭の中はパニックで何も考えられなくなっている。

熊の顔が目の前に来て、思わず目をぎゅっと瞑る。

熊の荒い息遣いが聞こえるほどの距離。

心音が異常な音を立てているのが耳の奥で聞こえる。

助けて……

口が動かなくて叫ぶことも出来ない。

熊が喉の奥で唸っているのが聞こえる。

ふと熊の顔が離れた気配を感じた。

「うわあ」

驚いて目を開ける。

熊が頭を私の足の間にに入れて私の体を持ち上げた。

「何、何！？」

熊の背中に乗せられたような形だった。いや、実際に乗せられていた。

よく分からないまま熊の背中で体の向きを変え、正面を向くように座りなおす。何となく降りようとは思えなかった。

「……何なのよ」

熊が馬鹿にしたようにちらりとこちらに顔を向けた後、正面を向いて歩き出した。のっそりとした動き。

とりあえず襲われるという恐怖からは抜け出し、多少のゆとりが生まれた。

さすがにこの後襲われるかもという恐怖はあまりない。

それよりもこの熊が何をしたいのかという疑問の方が遥かに大きくなった。

「あんた、私をどうしたいわけ？」

話しかけてみるも、当然反応のあるはずは無い。

私は大きく息を吐いて、熊の背中で横になった。

……疲れた。眠い。

熊の背中は温かった。にも関わらず体の震えが止まらない。

……顔が熱い。

……まぶたが、重い……

いつしか眠りに落ちてしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4354z/>

姫の守り神

2011年12月21日01時54分発行